

# 日本語学習者と母語話者の会話参加における変化 ——非対称的参加から対称的参加へ——

岩 田 夏 穂\*

キーワード: 日本語学習者と母語話者, 会話参加, 対称性と非対称性, イニシアチブ-レスポンス分析, アイデンティティ・カテゴリー

## 要 旨

日本語教育の現場では, 学習者と母語話者がともに活動に参加する様々な試みが行われている。参加者は, そのような場面でどのように会話に参加しているのだろうか。相手の発話を踏まえて談話を展開し合い, 対称的に参加している場合もあれば, 一方にイニシアチブが偏り, 非対称的なやり取りになる場合もあると考えられる。このような会話参加の様相が形成されるプロセスに焦点を当てた研究は, 今のところ非常に限られている。

本稿の目的は, 学習者と母語話者の会話参加における対称性, 非対称性という様相が協同構築されるプロセスを詳細に記述し, 何がその変化のきっかけとなったかを明らかにすることである。分析対象は, 留学生と日本人学生による自由会話である。会話参加の変化を量的に示すため, 発話の連鎖に注目するイニシアチブ-レスポンス分析(IR 分析)のコード化システムを用いた。変化のきっかけについては, 会話における相手と自分の捉え方, つまり参加者のアイデンティティが関わっていると考え, エスノメソドロジーの会話分析におけるアイデンティティ・カテゴリーの概念を用いて質的に分析した。

分析の結果, 母語話者の質問と学習者の応答という一方向的で著しく非対称的だったやり取りが, 次第に自発的に意見や情報を述べ合うという双方向的で対称的なものへと変化したことがわかった。そのきっかけは, 選択されるアイデンティティ・カテゴリーが「留学生対日本人」のように両者が対立するものから, 「スポーツ愛好家」のように両者を結びつけるものへ変わったことである。母語話者は, 会話の展開のリソースとなる情報やコメントを提供し, 学習者は, 質問やあいづち等で適切に相手に働きかけ, とともに互いの接点を見出そうとしていた。両者は, 共通基盤に立ってやり取りできるアイデンティティ・カテゴリーを柔軟に交渉, 選択し, それが参加の様相の変化をもたらしたことが示唆された。

## 1. はじめに

日本語教育の現場では, 日本語学習者と母語話者がともに活動し, 相互理解と交流を深める様々

\* IWATA Natsuho: お茶の水女子大学大学院人間文化研究科国際日本学専攻博士後期課程。

な実践が行われている。このような活動において、参加者が自律的にやり取りに参加し、会話の維持の役目を共有して談話を展開している対称的なやり取りもあれば、一方が主導権をとり続けている非対称的なやり取りも見られる。このような多様な会話の様相は、参加者のどのような行為によって達成されているのだろうか。また、その会話の様相に、教師の介入や活動の進め方が影響しているのだろうか。学習者と母語話者がやり取りをどう展開するのかという問題は、豊かな対話の実現を目指し、活動の場をデザインする教師にとって重要である。しかし、日本語教育の分野において、会話参加の対称性 (symmetry) や非対称性 (asymmetry) について論じた研究は非常に限られている。ましてや参加の様相が協同的<sup>1</sup>に作られていく過程に注目したものはほとんど見当たらない。

本稿は、対称的なやり取りを達成したと考えられる日本語学習者と母語話者の会話参加における変化のプロセスを提示し、その変化のきっかけとなった要因を探ることを目的とする。留学生と日本人学生の自由会話を対象とし、発話の連鎖のし方に基づいてコード化するシステムを用いることによって、会話全体の様相が参加者のやり取りを通して非対称的なものから対称的なものへと動的に変化するプロセスを分析する。そして、「成員カテゴリー化装置」(Sacks 1972a, b) の概念におけるアイデンティティ・カテゴリー (西阪 1995) の観点から考察することで、何が変化のきっかけとなったかを探る。そして、現場において学習者と母語話者が出会い、対話する活動を考えていく上での基礎研究として示唆を得ることを目指す。

## 2. 先行研究

### 2-1. NS-NNS の会話参加における対称性と非対称性の研究

会話の参加の母語話者 (native speaker, 以下 NS) と非母語話者 (non-native speaker, 以下 NNS) の会話においては、両者の言語能力の違いから、NS が会話をコントロールすることが指摘されてきた (Beebe & Giles 1984; Fan 1992; Gaies 1982; van Lier & Matsuo 2000)。これらの研究では、やり取り全体を通しての発話量、質問、あいづち、割り込み、トピックの導入の回数など、個々の参加者が何をどのくらいしたかという行為の頻度が主導権の指標として用いられている。

日本語の NS と NNS の会話参加を扱った研究には、Fan (1992) がある。日本語 NS と中国語 NS の大学生同士のペアによる日本語と英語を媒介語にした会話を対象とし、発話量、ト

<sup>1</sup> 本稿での「協同構築」は、joint construction あるいは、co-construction をさし、「参加者が何かを一緒に共有、経験、実行すること」(Linell 1998: 86)を意味する。これに近い概念に collaboration があるが、どの訳語をあてるかはまだ一定しておらず、「協働」「協同」「共同」が使われている(池田 2004)。本稿では、相手との間に連帯感など、なんらかの関係を築くべく両者が働きかけ合うやり取りを collaboration、すなわち「協働」とし、前述の「協同構築」と区別した。

ピック導入、質問の頻度、問題解決における修正行動の頻度を数量化した。その数値をもとに NS と NNS、NNS 同士の会話参加の特徴を分析している。そして、NS が媒介言語の「オーソリティー」として「言語ホスト」に、NNS は「言語ゲスト」になるとしている。具体的には、NS が会話の破綻を防ぎ、相互理解を確立する責任を果たすために、会話維持の仕事をより多く負担することをさす。それは、会話の参加が非対称的になることを意味する。

一二三 (1999) は、NNS との会話における NS の「心理面と言語面の関連」(p. 80) を明らかにするため、日本人ボランティアと学習者を対象に、NS 同士と NS と NNS ペアの会話資料分析と質問紙調査を行った。その結果、NS は、相手が NNS のときは「主導的役割の必要性」を感じ、「会話を円滑に進める配慮」をする割合が高いことがわかった。一二三 (1999) は、会話参加そのものを対象にした研究ではなく、参加者の社会的地位も異なっているため、単純に比較することはできない。しかし、NS と NNS のやり取りにおける NS 主導の非対称性を心理面から裏づける数少ない研究の一つである。

## 2-2. 対称性と非対称性の協同構築性

これまでの研究の流れを見てきて疑問に思うのは、果たして NS は常に主導的役割を担っているのだろうかという点である。参加者の会話への参加のし方は、言語能力のほかにも、知識や地位<sup>2</sup>、相手との相性、親疎レベル、文化的背景等、多様な要因が絡み合う複雑なものである。何よりも会話参加の全体的な様相は、ある条件を備えた参加者の一方的な会話運びで決まるものではなく、相手によってその行為が受け止められ、協同的にやり取りが展開されることで初めて形作られるものであろう。この会話参加の対称性、非対称性という様相の協同構築性は、個人の行為の頻度や個々の発話をばらばらにして既成のカテゴリーに分類する方法では、把握できない (Linell, Gustavsson & Juvonen 1988; Marková & Linell 1996)。分析には、会話の様相を所与の条件で決まる固定的なものと捉えるのではなく、相互依存する発話と発話の連なりを通して現れ、刻々と変化する動的なものとして捉える視点が必要である。以上を踏まえ、本稿では、会話参加の対称性と非対称性の定義を参加者による局所的 (local) なレベルでの連鎖が織り成す全体的 (global) な様相 (Linell 1990; Linell & Luckmann 1991) とする。

ところで、会話参加の対称性と非対称性を定義づける際に留意すべき問題は、会話における「優位性 (dominance)」や、「非対等性 (inequality)」「対等性 (equality)」とどう違うのか、ということである。Linell (1990) および Linell & Luckmann (1991) によると、会話における

<sup>2</sup> NNS が NS より高い社会的地位にある場合 (Woken & Swales 1989) や、話題に関する知識がある場合 (Zuengler 1989; Zuengler & Bent 1991) を対象にした研究では、NS が必ずしも主導権を握るわけではないことを明らかにしている。ただ、これらの研究も発話量や割り込みなどを指標としており、主導権がどう交渉されるのかは明らかになっていない。

「優位性」は、権力関係をはらむ概念であり、非対称性より非中立であるという。また、「対等性」や「非対等性」は、やり取りの背景にある条件の違い、たとえば専門家と素人に見られる知識の非対称性や、社会的地位の非対称性をさす。本稿では、社会的地位がほぼ同じ学生同士の自由会話を対象にしている。この会話に見られる非対称性に権力関係をほのめかす「優位性」を用いることが必ずしも適切ではない場合があると想定し、会話参加の様相を幅広く中立的に表現する「対称性 (symmetry)」および「非対称性 (asymmetry)」を用いることにした。

それでは、協同構築性に注目して会話の全体的な様相である対称性や非対称性を把握するには、どのような分析方法が適切だろうか。3. では、本稿が用いたコード化のシステムについて述べる。

### 3. イニシアチブ-レスポンス分析

Linell et al. (1988) の「イニシアチブ-レスポンス分析」(Initiative-Response analysis, 以下「IR 分析」)は、発話の連鎖に焦点を当て、やり取りの協同構築性を重視したコード化システムである。以下、Linell et al. (1988) および Linell (1998) の記述に基づいて概要を述べる。

IR 分析は、「ターン」を分析単位とし、各ターンが持つイニシアチブ的性質とレスポンス的性質に注目する。イニシアチブ的性質とは、談話を前に推し進める働きを持つ前方志向的 (point-forward) 性質である。イニシアチブ的性質は、(1) 相手からの応答要請 (質問など) と、(2) 新しい内容の談話への導入に分けられる。レスポンス的性質とは、「それまでの先行ターンに結びつくことによって談話に結束性をもたらす」(Linell et al. 1988: 417) 後方志向的 (point-backwards) 性質である。レスポンス的性質は、相手のターンにリンクするという性質のほかに、会話の流れから見てターンとターンの結びつき方が有標 (marked) かどうかという観点から検討される。通常、会話の流れに沿った発話は、相手の直前のターン (先行隣接ターン) の、その時話されているトピックに関する内容にリンクし、相手に適切な応答として受け止められる。そうではない結びつき方をしているものは有標となる。したがって、ターンのレスポンス的性質は、次の4点を目安に分類される。すなわち、(1) 相手の先行隣接ターンではなく、離れたターンにリンクすること、(2) 相手の先行隣接ターンの周辺的内容にリンクすること<sup>3</sup>、(3) 相手に適切で満足できる応答と見なされないこと、(4) 相手の先行隣接ターンを飛び越えて自分のターンにリンクすること、の4点である。

一つ一つのターンのコード化によるカテゴリー分類は、これらの性質を組み合わせて行う<sup>4</sup>。

<sup>3</sup> 直前のターンで話されてきた主要な内容ではなく、メタ・コミュニケーション的側面や言語形式 (Linell et al. 1988) といった「意味的に周辺的な部分」(Linell 1998: 171) について述べることを指す。

<sup>4</sup> たとえば、相手の発話内容について不明な点をたずねたり、新たな情報を要求したりするターンは、「相手の発話内容に関する質問」というターン・カテゴリーに分類される。そして、そのカテゴリーの評価点は、「評価 4」(注 6 参照)である。

Linell et al. (1988) の 18 のカテゴリに加え、本稿では、自分の発話の言語形式や内容について相手の理解を確認したり、問題があるときに協力を求めたりするターンに相当するカテゴリを作り、全部で 19 カテゴリ<sup>5</sup>とした。

各ターン・カテゴリは、イニシアチブの強さによって 6 段階に評価<sup>6</sup>され、1 点から 6 点の評価点が与えられる。カテゴリに分類した後は、それぞれの評価点のカテゴリに当てはまるターンの数を集計、グラフ化することで、参加者が会話を通してターンをどのようなカテゴリに配分しているかを把握する。会話に参加した参加者全員のターン・カテゴリの配分の組み合わせで、そのやり取りにおける参加の全体的様相が特徴づけられる。

#### 4. 研究目的と研究課題

本稿の目的は、NS と NNS の会話参加の様相が協同的に作り上げられていく動的なプロセ

<sup>5</sup> Linell et al. (1988) の 18 カテゴリと本稿で追加した 1 カテゴリ(7.\*)の内容は、以下の通りである。なお「カテゴリ」欄の記号は、会話データの個々のターンをカテゴリ化するとき用いる記号である。

ターンの特徴	カテゴリ	イニシアチブの側面	レスポンスの側面
1. イニシアチブ・レスポンスの強さ	(1) >	強い(相手の反応要求)	ほとんどない
	(2) ^	弱い(内容を導入)	ほとんどない
	(3) <>	強い(相手の反応要求)	相手の先行隣接ターンにリンク
	(4) <^	弱い(内容を導入)	相手の先行隣接ターンにリンク
	(5) <	ほとんどない	相手の先行隣接ターンにリンク
2. 先行隣接ターン以外の特定の先行ターンにリンク(局所性)	(6) ...>	強い(相手の反応要求)	先行隣接ターン以外のターンにリンク
	(7) ...^	弱い(内容を導入)	先行隣接ターン以外のターンにリンク
	(8) ...<	ほとんどない	先行隣接ターン以外のターンにリンク
3. 自分のターンにリンク	(9) =>	強い(相手の反応要求)	自分の先行ターンにリンク
	(10) =^	弱い(内容を導入)	自分の先行ターンにリンク
	(11) <=>	強い(相手の反応要求)	相手の先行隣接ターンを無視して自分の先行ターンにリンク
	(12) <=^	弱い(内容を導入)	相手の先行隣接ターンを無視して自分の先行ターンにリンク
4. 周辺の内容にリンク(焦点性)	(13) :>	強い	相手の先行隣接ターンにリンク
	(14) :^	弱い(内容を導入)	相手の先行隣接ターンにリンク
5. 不適切あるいは先送りと判断されるターン(適切性)	(15) —	ほとんどない	相手の先行隣接ターンにリンク
	(16) —>	非常に弱い	相手の先行隣接ターンにリンク
6. トピックの開始予告終結	(17) (>	弱い	
	(18) >)	弱い	
7.* 自分の発話に関する相手の理解確認、協力要求	(19) =>	弱い	自分の先行ターンにリンク

Linell et al. (1988: 439–440) をもとに筆者作成。

<sup>6</sup> 各評価のカテゴリに該当する主なターンは次の通りである。評価 1 は最もイニシアチブが弱く、ターンのパス等が該当する。評価 2 は、最小応答やあいづち、評価 3 は、相手の発話内容を踏まえて新しい内容を付加する「バランスの取れたターン」、評価 4 は、相手の発話内容についての質問、評価 5 は、それまでの内容に関係しない新しい内容の導入、評価 6 は最もイニシアチブの強いもので、それまでの内容に関係しない質問である。

スを記述し、その変化のきっかけとなった要因を明らかにすることである。研究課題は、以下の2点とする。

- (1) NS と NNS のやり取りで、初め非対称の様相であった参加の様相は、どのようなプロセスを経て対称的なものへと変化するのか。
- (2) 変化のきっかけとなった要因は何か。

## 5. 研究方法

### 5-1. 対象者とデータ

分析対象は、中級日本語学習者である留学生(ルーカス: 仮名)と母語話者である日本人大学生(しんご: 仮名)による約10分の自由会話である。表1は、両参加者の収録時における個人的背景である。

表1 対象者の情報

名前(仮名)	年齢	滞日期間	母語	身分
ルーカス	20代	9ヵ月	ドイツ語	都内某大学の日本語講座の短期留学生
しんご	10代		日本語	同講座の交流ボランティア

両者は顔見知り程度の間柄である。既知の間柄の会話を対象にしたのは、初対面に比べて会話開始から短時間で参加者同士の背景知識を踏まえた独自の自由な会話の展開が期待される(Maynard & Zimmerman, 1984) こと、本稿が留学生の会話教育への示唆を視野に入れており、現場で行われている自由会話クラスなどの実践(村岡 & 三牧 2000 など)に近い状況を作りたいと考えたからである。会話の録音と録画は、2003年7月に通常授業をしていた教室で行った。収録の直前に、協力者のペアに「自由に話してください」と指示し、筆者は、参加者から一番離れた席に座り、会話終了まで教室内にいた。音声データは、表2「文字化のルール」を参考に文字化した。

ところで、ルーカスとしんごのペアを対象とするまでのプロセスは、以下の通りである。まず、留学生9名と日本人大学生5名に協力を依頼した。そして、同じ留学生が日本人学生と話す場合(NNS-NS ペア)と留学生同士で話す場合(NNS 同士のペア)のデータを収録した。収録した会話データは、文字化し IR 分析を行った<sup>7</sup>。会話の前半と後半での様相の変化を見た結果、本稿

<sup>7</sup> 客観性を期すため、談話分析の経験のある協力者に全データ(10組分のペアの会話データ)の2割相当のデータのコード化を依頼した。それを筆者の行ったものと照合した結果、81%の一致率であった。

表2 文字化のルール

[	ことばの重なり
=	言葉，もしくは発話が途切れなくつながっている
(数字)	沈黙の秒数
(.)(..)	ごく短い間合いとそれより若干長いもの
::	直前の音の延び
?	語尾の音の上昇
.	語尾の音の下降
hhh	呼気音(主に笑い)
. hhh	吸気音
—	音が大きい

好井・山田・西阪(1999)を参考に作成。

が注目する NNS-NS ペアのうち，終始非対称の様相だったのが一組，終始対称だったのが一組，様相が変化したのが二組であった．本稿の分析対象は，変化した二組のうちの一つである．本稿は，やり取りの様相が変化するプロセスを詳細に記述することが目的である．そこで，複数のペアを比較するのではなく一組のペアのやり取りの変化を追うことにし，特に変化が著しく，後半の対称的やり取りに特徴があると思われたルーカスとしんごのペアを対象とした．その特徴とは次の通りである．今回のデータで対称的だった NNS-NS ペアのやり取りでは，まとまりのある内容を一人の参加者が話す間，もう一方が聞き手に徹してあいづちを打ちながら聞き，それが終わると話し手と聞き手が役割交代していた．その結果，会話の全体的な様相が対称的になっていた．しかし後半のやり取りにおけるルーカスとしんごは，各自自発的にコメントを述べ合うというターンの応酬によって談話を展開していた．これは，NNS 同士の対称的やり取りに見られた特徴であり，彼らはこの点で他の NNS-NS ペアと異なっていた．しかも会話の前半における彼らの会話参加は，しんごの一方的な質問とルーカスの受身の応答が繰り返され，際立って非対称的であった．それがどのようなプロセスを経て変化したのだろうか．本稿ではこの点に焦点を当てる．

## 5-2. 分析方法

まず，課題(1)については，会話の流れに従って会話参加がどのように変化するかを把握するために，全体で約 200 ターンであったデータを前半と後半に分けたもの，さらに詳細に変化を追うために 50 ターンごとに分けたものを，それぞれ IR 分析のルールに従ってコード化した．その結果を実際のやり取りと照合し，会話の流れの変化がどうグラフに反映されているのかを探った．

続いて課題(2)の変化のきっかけについては、参加者がその会話に「何者として臨んでいるのか」という「アイデンティティ・カテゴリー」に注目して分析した。西阪(1995)は、エスノメソドロジーの会話分析の創始者であるサックスの「成員カテゴリー化システム」(Sacks 1972a, b)における「アイデンティティ・カテゴリー」の概念について記述している。それによると、「アイデンティティ・カテゴリー」とは、人が自分を「何者か」と考えたときに当てはまるカテゴリーのことである。また、もし一つのカテゴリーが適切であるとき、そのカテゴリーが属する集合カテゴリーが適切になるという。西阪の記述に基づき、筆者を例にして考えてみる。筆者は「女性」「大人」「日本人」「日本語教師」など、複数のアイデンティティを持っている。そして「教師」というカテゴリーは、「学生」や「ティーチング・アシスタント」といった、「学校の中の立場」という集合の中の一つである。筆者が「教師」としてカテゴリー化されるのが適切な場面(例えば授業中など)では、そこにいる女子留学生は、「学生」としてカテゴリー化されるのが適切であり、「女性」としてカテゴリー化されるのは適切ではないということである。また、西阪(1995)は、他者との相互行為において、参加者たちは、互いにどのカテゴリーが適切かを、自分たちの行為や活動を組織する中で管理していると述べている。先の例でいえば、筆者が女子留学生と教室外でやり取りする場合、「教師と学生」として向き合うのか、それとも「女性」同士として向き合うのかは、相手とのやり取りの中で交渉して決めていくのである。そして会話の参加者たちは、そのカテゴリーに適切だとされる振舞い方を期待される。

本稿の参加者たちも、あるアイデンティティ・カテゴリーを選択して会話に臨んでいる。選択されるアイデンティティ・カテゴリーが交渉され、変化すれば、参加のし方も違ってくると予想される。そこで課題(2)では、カテゴリーの交渉と参加の対称性の変化との関連を中心に考察する。

## 6. 結果と考察

### 6-1. 前半と後半での変化

図1と図2は、約200ターンのデータを前半と後半に分けてIR分析した結果をグラフ化<sup>8</sup>したものである。両者では、以下のような参加の様相の変化が見られた。

このグラフから、会話の前半では非対称的であった参加の様相が後半で対称的なものへと著しく変化していることがわかる。前半では、両者のターンの配分が大きく異なっている。評価2, 3, 4の三つのターンのうち、評価2(あいづちや最小応答)の配分はほぼ同じだが、しんごのターン

<sup>8</sup> 本来折れ線グラフは、時間軸に沿った変化を表すものであり、ターンの配分を示すには、棒グラフを用いるべきである。しかし本稿では、折れ線グラフのほうが二人のターン配分の関係がわかりやすいと判断し、敢えて折れ線グラフを用いた。



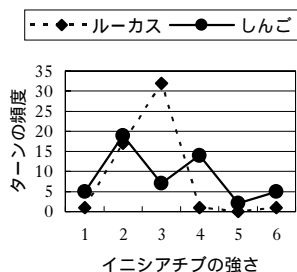


図1 前半(1~100 ターン)

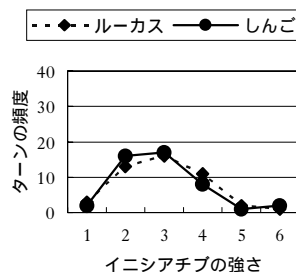


図2 後半(101~196 ターン)

は評価4(質問)に配分が偏り、相手の発話をふまえて新しい内容を導入する評価3のターンの配分が低くなっている。それに対して、ルークスは評価3の配分が最も高く、評価4は低いという反対の配分になっている。しかし後半では、両者の評価2, 3, 4のターン配分はほぼ等しくなっていることから、互いに相手の話をあいづちを打ちながら聞き合い、相手の話した内容を踏まえて自分のコメントを述べるというやり取りに変わっていることが窺える。

## 6-2. アイデンティティ・カテゴリーと対称性の変化

次にデータを50ターンごとに区切ってグラフ化したものと会話例を用いて、具体的な変化のプロセスを見ていく。

### (1) 1~50 ターン

図3は、会話収録開始直後から50ターンまでの会話をグラフ化したものである。両者の参加のし方の際立った非対称性が現れている。

このときのやり取りでは、しんご(会話例ではS)の唐突な質問とルークス(会話例ではL)の受身的応答という、一方向のやり取りに特徴がある。会話例1は、このグラフが該当するやり取りの一部である。

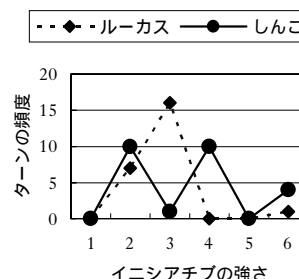


図3 1~50 ターン

#### 会話例1

- 20L: あの家教師みたい[な:: [感じて::え:: [だいたいあの:うん喫茶店(.)などの(.]  
 21S: [あ::!! [家教師ですか [あ:::  
 22L: 場所で会います。  
 23S: は:::h(.)日本に来て::(.)一番ここは変だなんて思った(.)ことはなんですか  
 24L: 一番 あの 変なこと  
 25S: 変 変だな: 日本人は ちょっと変だな: って[(.)°おもうこと°  
 26L: えっへ hhh [う:::ん はりはそれはあの:  
 難しいとおもいます=あの::今あの::だいたい日本(.)の生活に::ん なれましたので::  
 27S: あ:あ: じゃあ::じゃびっくりしたこと

28L: う:::ん (3) 最初にびっくりしたことは:: (..)あの: 日本人はだいたいどこでも(.)  
寝られることです

~~~~~ 13 ターン省略 ~~~~~

(日本人は場所をかまわず寝ている。ドイツ人も旅行のときは乗り物で寝るが)

42L: あの:: 地下鉄の場合は: (2) う h: んすごく珍しいと思います

43S: う:::ん(.)h あ: (4) .h じゃあ ここは:: 逆に:h あ:: ヨーロッパに取り入れたい(.)  
ことだなぁって思ったことはなんですか(..)

しんごは、23S で、それまでのルーカスのアルバイトの話から、外国人であるルーカスが見た日本についての感想を求める質問を唐突に投げかけている。そして、その後続くやり取りで、ルーカスはしんごの質問が期待する答えを適切に提供しようと努めている。このやり取りから考えられることは、この時点でしんごがルーカスを「日本に住んでいるヨーロッパからの留学生」、そして自分は「日本人」というカテゴリーの成員として位置づけ、ルーカスもそのカテゴリーでやり取りすることを受け入れたということである。しんごの質問をきっかけに現れた「日本人対留学生」というアイデンティティ・カテゴリーは、両者の質問と返答の応酬を通して相互行為的に達成されている(杉原 2003)のである。

もう一つ特徴的なのは、しんごからは新しい内容提供がなく、逆にルーカスからはしんごへの問いかけがまったく見られないことである。しんごは、ルーカスの応答を聞き、最終的に自分からは質問の意図や意見は言わずに、次の質問(43S)に移っている。図3のグラフに見られる非対称性は、「留学生対日本人」というカテゴリーの中で、NS が NNS に一方的に情報を聞き出すインタビューのようなやり取りの特徴を示している。

## (2) 51~100 ターン

図4は、しんごのターン配分の大きな変化を示している。しんごは、会話例1での23Sのような唐突な質問がまだ観察されるものの、ターン配分からは、ルーカスがターンを取っているときに打つあいづち(評価2)の増加や、自分の意見を述べる(評価3)の増加が観察され、談話を相手とともに展開しようとし始めていることが窺える。

一方ルーカスの方は、相手の発話に反応するだけではなく自分のほうからしんごに働きかけ、自らトピック展開のための発言をし始めている。

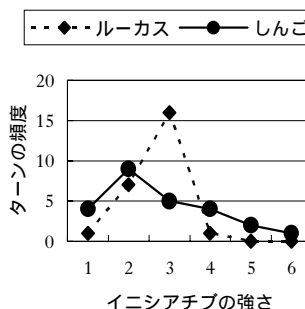


図4 51~100 ターン

## 会話例2

79L: (カレーは)うん 食べたら::あの気分がちょっと:w[るくなる

80S: [あ:: (1)う:::ん::一番好きな料理は何ですか

食べ物[日本の料理で

81L: [う:::ん (2)たぶん(.)おそばです

82S: あ h° そうですか° 昨日も食べてましたね hhh  
 83L: うん 今日もって 今日も持ってきた h し h た hhh hhhh  
 84S: あはは そんなに好[き:  
 85L: [うん大好きです

しんごは、80S で質問によるトピック転換をしているが、81L のルーカスの応答に対し、笑いを伴ったユーモアのある発言(82S)を返している。そしてそれをルーカスが受け止め(83L)、一緒に笑い合っており、それまでには見られなかった連帯感を確認する協働的なやり取りが観察される。そのきっかけになった 82S は、しんごの観察に基づくルーカスに関する情報である。しんごは、ルーカス自身に対して関心を持っていることを主張し、ルーカスと自分の接点をやり取りに持ち込み、二人が共有できるカテゴリーを模索していると考えられる。先述の「留学生対日本人」という対立するカテゴリーからやり取りが変化していることは、しんごのターン配分に占める評価 3 (バランスの取れたターン) の割合の大きな変化に現れている。

### (3) 101~150 ターン

この段階(図 5)では、ルーカスとしんごのターン配分がこれまでのやり取りに比べて近づいている。また、二人とも評価 2, 3, 4 のターン配分に極端な差がなくなっている点が注目される。会話例 3 を見ると、しんごが相手との共通点を積極的に焦点化しているのがわかる。相手の話を一方的に引き出すだけでなく、自分の発言もリソースとして提供するようになっている点に変化が見られる。

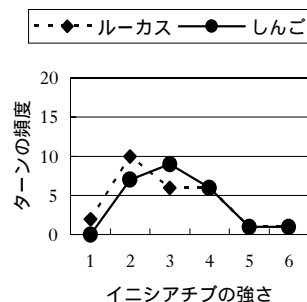


図 5 101~150 ターン

#### 会話例 3

101L: うんうん  
 102S: (あ::バレー b あ:聞きました)セッターだったそう[ですね::  
 103L: [そうですね:(...)  
 104S: ぼくもバレーやってみました。  
 105L: d も::今::今はぜんぜんスポーツやってないから::  
 106S: うんう[ん  
 107L: [うん hhhh ちょっと困る:hhhh . hhh

ルーカスは、会話例 3 に先行する談話で「来日後、何かスポーツをしているか」というしんごの質問に対し、「ぜんぜんしておらず、太ってきた」と答えていた。しかししんごは、あまりその発話に注目せず、すぐに「来日前にしていたスポーツ」に話題を変えている。そして、ルーカスがバレーボールをしていたということを受け、102S でルーカスについて知っている内容(セッターをしていた)について述べている。さらに自分もバレーの経験があることに言及し(104S)、二人の共通点を焦点化しようとしている。しかしルーカスは、105L でしんごの先行隣接ターンをトピック化せず、先に受け止められなかった自分の発話内容を繰り返すことで、相手の受け止

めを要求しているのである。

以上のように、この段階ではルーカスの談話展開におけるイニシアチブの強まりが認められる。ルーカスが会話の中で行っている行為も、これまではしんごの質問に対する応答という受身のものが多いのに比べ、バラエティに富んだものになっている。例えば次の会話例 4 は、ルーカスから出たしんごに対してユーモアのあるからかいの発言の例である。

**会話例 4**

119L: 空手の練習 [ですか

120S: [はい か [らての:(.)練習でジムに行くんで

121L: [あ:: あ 気をつけてね hhhhhh

122S: hh あ はい だいじょうぶっす。はい(.)#から ジム::(.)が終わったらまだ戻ってきます

ルーカスは、しんごが普段空手の練習で生傷が絶えないことを知っている。121L はそれに言及している。つまり、共通する知識を持ち込み、互いの共通基盤の上でやり取りしようとする試みは、しんごだけではなくルーカスもしているのである。しんごは 122S で、その試みを笑いとともに適切に受け止めている。

このような互いの共通点をリソースにするトピック展開と自分からの積極的なコメントという応酬を通して、この段階でのカテゴリーが「スポーツ愛好者」というような、二人が共有するものになったと考えられる。セッション前半に見られた相手に話させるための質問とそれに対する応答という非対称的やり取りから、両者が同じように参加できるようなカテゴリーでの対称的やり取りへと変わってきている。つまり、会話における行為と両者のアイデンティティ・カテゴリーが相互反動的に変化していることが窺える。この段階の最後では、会話例 5 のように連帯感を確認し合う協働的なやり取りが観察されるようになる。

**会話例 5**

130S: でもなんか JJ が(カラオケに)行くとか言ってましたよ h

131L: あそうですか。

132S: はい

133L: あの JJ さん あの::昨日(.)行っただお [もいますよ

134S: [きhのhうも行きました .hき [のう

135L: hh, [カラオケが

大好きで h す hh .hh

130S でしんごがトピックとして導入した JJ という留学生について、ルーカスが 133L の情報を提供することでトピック化に協力している。134S でしんごが笑いながら繰り返すことで了解を示し、それに重なるルーカスの JJ に対する評価 (135L) で、二人の連帯感を確認するというシークエンスになっている。ルーカスは、135L で、個人の意見を述べるというよりは、二人の一致した観点を代弁しているように見える。自分を次の話し手として自己選択することは、観点的自発的表出であると同時に、それ自体が相手の発話への同意と調和を示すものである。

(Svennevig 1999) . そのやり取りは、互いが向き合って相手の言うことの理解に努めるというよりも、互いが同じ土俵に立ってある事柄に向き合って語り合っているように思われる。それは、相互行為に「同じ周波数」(Edelsky 1997: 196) で参加していることを実感し合う場になっていると考える。

#### (4) 151~196 ターン

最後の段階のやり取りを示す図6では、二人の評価3のターン、つまり「バランスの取れたターン」がほぼ同じ位の割合になっている。またこれまでとは逆に、ルーカスのほうがしんごよりもイニシアチブの高いカテゴリーに多くのターンを配分していることに注目したい。次に挙げる会話例6に、ルーカスのトピック展開におけるイニシアチブの行使が表れている。

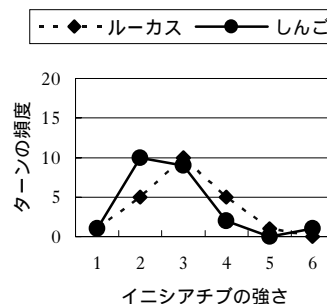


図6 151~196 ターン

#### 会話例 6

153S: ジェットコースターは好きですか

154L: だ:い好きで[:す

155S: [あ:僕も大好きです。お化け屋敷は好きですか

156L: (...)すみません?

157S: お化け屋敷 Ghost house

158L: あ:::あ::う:ん(.)場所によってちがうと思います

S: hhh

159L: 時々ちょっと つ つまらないとおもいます

160S: あ:::です うん ぼくもそうおもいます [あの

161L: [でも、ジェットコースターが(.)だ::いすき あのラ

クーアのジェットコースター

162S: 乗ったんですか

153S でしんごの質問に、154L で強い同意を示したルーカスは、一旦お化け屋敷に移りそうになったトピックの焦点を、160S のしんごの発言に割り込む形でジェットコースターに引き戻し(161L)、自分の情報を付加することで、再トピック化している。この試みは、しんごがルーカスの発話を完成する質問によって積極的にトピック化され(162S)、その後は、お互いのジェットコースターに関する情報を競争のように披露しあうシークエンスが続く。ルーカスのイニシアチブは、しんごの「質問」というイニシアチブに対して、トピック化するか否かを選択する点に現れている。しかし、このケースで観察されたいささか強引にも見えるルーカスの「ジェットコースター」の再トピック化は、それがしんごと共有できる内容であることが154L と 155S で確認されており、それが前提となっている。このことから、ルーカスも共通のトピックを展開しようとしていると言える。この段階では、両者はより強固な共通基盤の上に立って、対称的に会話を展開している。

## 7. ま と め

これまでルーカスとしんごのやり取りを分析した結果、課題（1）で掲げた日本語学習者と母語話者との会話参加における対称性の変化のプロセスに関して、次のことが明らかになった。

当初は、しんごの質問とルーカスの応答という一方向的で非対称的なやり取りであった。それが、次第に相手の質問によってではなく自発的に意見や情報を述べる「バランスの取れたターン」の比率が高くなるという変化が見られた。しんごの場合は、やり取りのし方が質問の繰り返しではなく、相手の話を踏まえて会話を進めようというものに変わった。一方ルーカスは、質問に答える受身的なものから、積極的に相手に働きかけるイニシアチブの強いものに変化した。

次に、課題（2）の「変化が起きたきっかけ」について述べる。ルーカスとしんごは、会話セッションの前半で「留学生対日本人」というカテゴリーで会話を始めた。しかし、そのカテゴリーは固定されず、両者は、やり取りを通して互いに何者として向き合うかを絶えず交渉した。その理由としては、「留学生対日本人」のカテゴリーに基づくやり取りでは、二人が共有できるものが発見できず、会話がスムーズに展開しにくかったということが考えられる。そこで二人は、自分たちの接点に焦点を当てるようにやり取りを組織し、互いのカテゴリーを交渉し始めた。そして、その試みによって彼らのカテゴリーは「留学生対日本人」という対立するものから、「スポーツ愛好者」、さらには、「同じイベントに参加する者」へと両者が共有できるものへと変化し、それに伴ってやり取りの対称性も変わっていった。

このペアの会話参加の変化には、両参加者の相手への働きかけ方が重要な働きをしていたことも注目される。具体的には、(1) しんごが、相手の話を聞き出すだけでなく、積極的に自分の情報を会話のリソースとして提供したこと、(2) ルーカスに、あいづち、相手の話のトピック化、適切な箇所での質問など、相手から話を引き出す態度があったこと。そして、(3) お互いに共通の基盤を模索し、共有できる内容に敏感に反応したことである。これらが、柔軟なカテゴリーの選択に基づく対称的なやり取りの実現に寄与していた。

以上のことから、今回の対象者のような知り合い程度の既知関係にある参加者のやり取りの場合、参加者の関係がやり取りの様相を決めていくというよりも、やり取りそのもののプロセスにおいて、その関係が決まっていく (Maynard & Zimmerman 1984) ことが確認された。親密な関係にある参加者では、共通基盤が前提にあり、会話の運び方もある程度決まっているため、今回とは異なった様相になることが予想される。

また、対象者の NNS が欧州文化圏出身であったことが、会話の参加のし方に影響している可能性があるが、今回の結果からは、判断を下すことはできない。文化的背景と会話の様相の関連は興味深い問題ではあるが、本稿では、個人の要因ではなく、あくまで参加者間のやり取りを通して相互行為的に達成された様相に焦点を当てて分析、考察を行った。

## 8. 日本語教育への示唆と今後の課題

本稿では、これまでの研究で NS の主導権と非対称性を指摘されてきた NNS と NS の相互行為において、両者が協力して会話維持に当たり、非対称的だった会話参加が対称的になりうることを具体的に例示した。そして、アイデンティティ・カテゴリーの交渉と選択が会話参加の変化のきっかけとなることを示唆した。NNS と NS の会話参加の対称性と非対称性は、NS だから主導権をとるというのではなく、あくまでも参加者の局所的な発話の連なりによって協同的に作り出される相互行為的な現象なのである。

本稿は、筆者に対して協力的な参加者の一組のペアによる自由会話のセッションを対象としたものであり、この結果を一般化することは目指していない。しかし本稿で得られた知見は、現場で行われている学習者と母語話者の活動において非対称的なやり取りが問題になった際に示唆を与えることができると考える。その問題とは、たとえば次のような場合である。母語話者が学習者から話を引き出すだけになっているペアのやり取りは、固定的なアイデンティティ・カテゴリーに基づいている可能性はないだろうか。そこに教師の意識や用意された活動や作業の流れが影響していることはないか。教師が母語話者に寄せる「学習者の話す機会を優先してほしい」という無意識の期待や、「外国人と日本人」という対立するアイデンティティを前提にした活動のテーマ設定などが、参加者の参加のし方に関係しているかもしれない。このように、本稿の知見は、現場での問題を分析する上で手がかりとなるだろう。

今後の課題としては、主に次の三つの点があげられる。一つ目は、IR 分析の位置づけと評価点の問題である。IR 分析によるターン配分から見た参加の様相は、いわば内容を盛り込む「入れ物」としてのターンの連なり方から見たものである。一見参加のし方が対称的に見える会話でも、内容的には多様な対称性、非対称性を内包していると考えられる<sup>9</sup>。IR 分析の結果を踏まえ、やり取りが内容的にも対称的かどうかをさらに質的に吟味する必要がある。

また、イニシアチブの強さによってコード化したカテゴリーに与えられる 1 から 6 までの評価点については、なぜその点数になるのか基準が明確ではないという批判がある (Itakura 2001)。Linell et al. (1988) には、この評価基準になったいきさつが記載されていない。今回コード化にあたり、イニシアチブの相対的な強さを検討し、この評価点を妥当なものとして適用したが、今後より綿密に検討していく必要がある。

二つ目は、非言語行動を入れた分析である。今回の分析対象は音声データとそれを文字化した資料であり、映像データは、分析に補助的に用いるにとどめた。しかし、会話参加を考える際に、

<sup>9</sup> たとえば、意味交渉が盛んに行われた接触場面でのやり取りでは、会話の参加は対称的であっても、談話の展開という意味では停滞する。このようなやり取りを、ルーカスとしんこの後半部分のような対称的に展開しているやり取りと同じように扱えるかという問題がある。

会話への関与の熱心さは重要で、それには、参加者の身体的な動きが大きく影響していると考えられる。これらの要素を視野に入れた分析が課題である。

三つ目は、やり取りが行われる活動と参加者の行為の関連である。今回得られた結果は、「セッティングされた知り合い同士の自由会話」という活動の枠の中で行われた会話の様相であり、活動が変われば、参加者の会話参加のし方も変わる可能性がある。Marková & Linell (1996) の指摘する「行為と活動の相互依存性 (Act-activity interdependence)」を踏まえ、異なったタイプの活動での会話参加を分析する必要がある。

以上を今後の課題として、これからもさまざまな角度から分析を続けることで日本語学習者が参加する会話参加の実態を明らかにし、参加の対称性、非対称性の本質を探っていきたい。

#### 付 記

本稿は、2004 年お茶の水女子大学大学院人間文化研究科修士論文の一部をまとめたものである。

#### 謝 辞

本稿のデータ収録にご協力くださった学生お二人と、本稿をまとめるにあたり、ご指導とご助言をくださったお茶の水女子大学の岡崎眸先生、佐々木泰子先生、東京海洋大学の池田玲子先生をはじめとする多くの方々に、深く感謝の意を表します。

#### 参 考 文 献

- 池田玲子 (2004) 「日本語学習における学習者同士の相互助言」『日本語学』Vol. 23, 36–50.
- 杉原由美 (2003) 「地域の多文化間対話活動における参加者のカテゴリー化実践——エスノメソドロジーの視点から——」『世界の日本語教育』13, 1–18.
- 西阪 仰 (1995) 「成員カテゴリー」『言語』Vol. 24 (11), 105–109.
- 一二三朋子 (1999) 「非母語話者との会話における母語話者の言語面と意識面との特徴及び両者の関連」『教育心理学研究』47, 490–500.
- 村岡貴子・三牧陽子 (2000) 「大阪大学豊中キャンパスにおける『日本語パートナー』の特性と活動——1999 年第 1 学期の実践報告および考察——」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』第 4 号, 55–65, 大阪大学留学生センター.
- 好井裕明・山田富秋・西阪仰編著 (1999) 『会話分析への招待』, 世界思想社.
- Beebe, L. M. & Giles, H. (1984) Speech-accommodation theories: a discussion in terms of second language acquisition, *International Journal of Social Language*, Vol. 46: 5–32.
- Edelsky, C. (1993) Who's got the floor?, In D. Tannen (ed.), *Gender and Conversational Interaction*, New York, Oxford University Press: 189–227.
- Fan, S. K. (1992) Language management in contact situations between Japanese and Chinese, *Unpublished Ph.D. Dissertation*, Department of Japanese Studies, Monash University, Australia.
- Gaies, S. J. (1982) Modification of discourse between native and nonnative speaker peers, *Papers 16th Annual TESOL Conference*: 1–32.
- Itakura, H. (2001) *Conversational dominance and gender: A study of Japanese speakers in first and*



- second language contexts*, Amsterdam, John Benjamins Publishing Company.
- Linell, P. (1990) The power of dialogue dynamics, In I. Marková and K. Foppa (eds.), *The Dynamics of Dialogue*, New York, Harvester Wheatsheaf: 147–177.
- (1998) *Approaching dialogue*, Amsterdam, John Benjamins Publishing Company.
- Linell, P., Gustavsson, L. & Juvonen, P. (1988) Interactional dominance in dyadic communication: a presentation of initiative-response analysis, *Linguistics*, Vol. 26: 415–442.
- Linell, P. & Luckmann, T. (1991) Asymmetries in dialogue: some conceptual preliminaries, In I. Marková and K. Foppa (eds.), *Asymmetries in Dialogue*, New York, Harvester Wheatsheaf: 1–20.
- Marková, I. & Linell, P. (1996) Coding elementary contributions to dialogue: individual acts versus dialogical interactions, *Journal for the Theory of Social Behaviour*, Vol. 26 (4): 353–373.
- Maynard, D. W. & Zimmerman, D. H. (1984) Topical talk, ritual and the social organization of relationships, *Social Psychology Quarterly*, Vol. 47 (4): 301–316.
- Sacks, H. (1972a) An initial investigation of the usability of conversational data for doing sociology, In D. Sudnow (ed.), *Studies in social interaction*: 31–74. (北澤裕・西阪仰訳「会話データの利用法: 会話分析事始め」, 北澤裕・西阪仰編訳『日常性の解剖学』, マルジユ社, 1989: 93–173.)
- (1972b) On the analyzability of stories by children, In J.J. Gumperz and D. Hymes (eds.), *Directions in sociolinguistics: The ethnography of communication*, New York: Holt, Rinehart & Winston: 325–345.
- Svennevig, J. (1999) *Getting acquainted in Conversation: A study of initial interaction*, Amsterdam, John Benjamins Publishing Company.
- van Lier, L. & Matsuo, N. (2000) Varieties of conversational experience: looking for learning opportunities, *Applied Language Learning*, Vol. 11 (2): 265–287.
- Woken, M. D. & Swales, J. (1989) Expertise and authority in native-non-native conversations: the need for a variable account, In S. Gass, C. Madden, D. Preston, and L. Selinker (eds.), *Variation in Second Language Acquisition: Discourse and Pragmatics*, Clevedon, Multilingual Matters: 228–244.
- Zuengler, J. (1989) Performance variation in NS-NNS interactions: ethnolinguistic difference, or discourse domain? In S. Gass, C. Madden, D. Preston, and L. Selinker (eds.), *Variation in Second Language Acquisition: Discourse and Pragmatics*, Multilingual Matters: 228–244.
- Zuengler, J. & Bent, B. (1991) Relating knowledge of content domain: an influence on native-non native conversations, *Applied Linguistics*, Vol. 12 (4): 397–415.